

■ テーマ展「戦に備えるー彦根藩の武具管理ー」展示作品リスト ■

No.	指定	名称	年代	数量	法量 (縦cm×横cm)	所蔵者
1		正諫記	承応2年(1653)5月3日	1冊	24.0*16.9	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)
藩主の武具管理						
2	重文	御天守ニ納リ有之候品之覚帳	宝暦9年(1759)9月	1冊	27.0*20.7	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
3	重文	彦根武器類帳	嘉永7年(1854)8月	1冊	23.3*16.5	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
4	重文	御宝蔵虫干御用留	弘化2年(1845)6月	1冊	25.0*17.0	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
5	重文	西郷員章意見書	嘉永5年(1852)12月6日	1通	16.7*79.6	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
6	重文	侍中由緒帳(三十三)	元禄4年(1691)	1冊	29.5*22.0	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
7	重文	御書御指紙抜書	寛政12年(1800)	1冊	14.0*20.3	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
8	重文	年々御指紙書抜	江戸時代後期	1冊	14.0*20.0	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
知行取藩士の武具管理						
9	重文	武者組物定(一)	江戸時代後期	1冊	27.3*20.1	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
10	重文	小荷駄奉行武者組(八)	江戸時代後期	1冊	27.8*20.1	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
11		朱漆塗紺糸威切付小札二枚胴具足	江戸時代	1領	胴高36.5cm	個人
12		具足櫃	江戸時代	2棹	39.0*39.0 高さ47.0cm	個人
13	市指定	腰物武器馬具類記	安政4年(1857)7月	1冊	14.2*20.4	個人 (宇津木三右衛門家文書)
14	市指定	腰物類武器并馬具類細記	天保3年(1832)	1冊	14.0*40.6	個人 (宇津木三右衛門家文書)
15		伝来具足・武具覚	江戸時代後期	1冊	15.4*43.0	彦根城博物館 (三浦十左衛門家文書)
16		御武器并御道具類絵図・御家中指物武器類絵図	江戸時代後期	3枚 (428枚のうち)	40.8*28.4	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
17		上使御行列絵図	江戸時代後期	1巻 (5巻のうち)	天地35.8cm	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)

No.	指定	名称	年代	数量	法量 (縦cm×横cm)	所蔵者
18	市指定	役高導入理由書	江戸時代後期	1通	16.0*155.7	彦根城博物館 (木俣清左衛門家文書)
19	重文	井伊直弼直書写	嘉永3年(1850)12月27日	1通	16.0*67.0	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
足軽の武具管理						
20		井伊直孝御書付之写	江戸時代	1冊	14.5*38.3	個人 (西郷藤左衛門家文書)
21		御櫓御武具之覚	江戸時代	1冊	11.6*31.8	個人 (足軽佐藤家文書)
22	重文	御細工所預り御武道具之覚	宝暦9年(1759)7月	1冊	27.5*19.5	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
23	重文	年々御指紙書拔	江戸時代後期	1冊	14.0*20.5	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
24		御武具御修覆留	寛政6年(1794)	1冊	12.2*33.8	個人 (足軽佐藤家文書)
25	重文	三崎御陣屋御絵図	江戸時代後期	1舗	67.4*121.2	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)
26		筒等備付・諸陣詰人数等書付	江戸時代後期	1冊	24.2*16.9	個人 (彦根藩大久保家文書)
27		松平大和守様御備場備付	江戸時代後期	1冊	24.4*16.5	個人 (彦根藩大久保家文書)
28		御物頭中書状	江戸時代後期	1通	16.0*36.2	個人 (足軽佐藤家文書)
29		小幡組武器返済覚	江戸時代後期	1通	11.8*32.5	個人 (足軽佐藤家文書)
30		銃卒要具之次第并心得之大略(写)	万延元年(1860)閏3月	1冊	24.4*16.4	彦根城博物館 (北川鍋太郎家資料)
31		御軍役砲術中り附帳	安政3年(1856)1月	1冊	14.1*24.0	彦根城博物館 (北川鍋太郎家資料)

写真解説

*番号は作品リストと一致しています。

4 御宝蔵虫干御用留 1冊

縦 25.0cm 横 17.0cm

弘化2年(1845)6月

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

国指定重要文化財

御宝蔵 (彦根城本丸東側に位置) で保管していた元藩主の武具や道具などを虫干しするにあたって作成された、弘化2年～安政5年(1858)の事務文書を控えた帳面。概ね毎年旧暦の6月～7月 (現在の7月～8月頃) の約1ヶ月間、御宝蔵から

御守殿 (鐘の丸南東側に位置) へ收藏品を運び出して虫干しを行い、またその際に武具や茶器の手入も行ったことが記されています。これらに必要な道具や人足などが藩内の様々な部署によって手配されたことが確認できるなど、藩主の武具が組織的に管理されていたことがわかる資料です。



11 朱漆塗紺糸威切付小札二枚胴具足 1領

胴高 36.5cm

江戸時代

個人蔵

宇津木三右衛門家9代目景福の所用と伝える具足です。宇津木三右衛門家は知行 (家禄) 200石～500石の中堅クラスの彦根藩士でしたが、景福は弓足軽二十人組や鉄砲足軽四十人組などの物頭 (彦根藩足軽組の頭)、城使役 (幕府と藩との連絡調整を行う役職) や側役などを勤め、彦根藩13代当主井伊直弼の側近として重用されました。

具足の形式は、軍装を赤で統一した「井伊の赤備え」のスタイルに則って全体を朱漆塗とし、兜には金色の天衝前立を備えています。兜の吹返には宇津木家の家紋である「六枚鷹羽」を据えています。



13 ^{こしものぶきばぐるいき} 腰物武器馬具類記 1冊

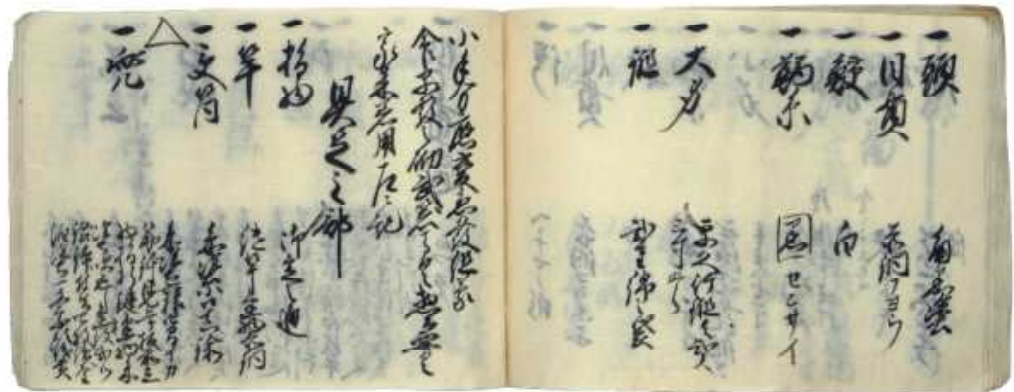
縦 14.2cm 横 20.4cm

安政4年(1857)7月

個人蔵 (宇津木三右衛門家文書)

市指定文化財

^{こてわけぐみ} 小手分組に属した知^{ちぎょうとりはんし}行^う取藩士の宇津木景福が急な出陣の際に持参する武具のほか、戦地に引き連れる家来の武具などを安政4年に書き記した帳面。小手分組は有事に緊急出動が可能な精鋭部隊で、18世紀後半からしばしば日本近海に出没するようになった外国船に対する海防強化^{かいぼうきょうか}を目的として、彦根藩が設置したものです。この資料は、幕末期の軍事動員にあたり、自前で武備を調えなければならなかった一知行取藩士の家における、家来や武具の数・構成の全体が具体的に示されているものとして注目されます。



24 ^{おんぶぐおんしゅうふくとめ} 御武具御修覆留 1冊

縦 12.2cm 横 33.8cm

寛政6年(1794)

個人蔵 (足軽佐藤家文書)

寛政7年(1795)に彦根藩弓組足軽^{ゆみぐみあしがる}(弓を担当する足軽集団)の武具を修復した際の経緯を記録した帳面。この資料には、足軽組の武具の保管庫であった彦根城内^{やぐら}の櫓を藩の役人が見分し、そこにあった甲冑^{かっちゅう}20領全てを細工所^{さいくしよ}(藩主の諸道具修復を担う部署、現在の二の丸駐車場の南東角辺りに位置)で修理するよう命じたと記されています。また、これらの甲冑は史料の中で「組渡り御武器^{くみわた おんぶき}」(足軽組に渡る藩主の武器の意)と表現されており、足軽組の武具は藩主が支給したもの(究極的には藩主のもの)と認識されていたことがうかがえます。足軽組の武具のメンテナンス事情や、藩主と足軽組の関係が垣間見える貴重な資料です。



29 小幡組武器返済覚 1通

縦 11.8cm 横 32.5cm

江戸時代後期

個人蔵 (足軽佐藤家文書)

お ば た じ ろ う は ち ゅ う ぐ み (小幡二郎八組) ^{もの が し ら} (物頭) ^{あ し が る ぐ み} (足軽組の頭) ^{て っ ぽ う あ し が る さ ん じ ゅ う に ん ぐ み} を 勤 め る 鉄 砲 足 軽 三 十 人 組) ^{か っ ち ゅ う} が 行 っ た 甲 冑 の 貸 借 に 関 す る 記 録 を、彦 根 藩 足 軽 で「御 武 器 掛 り」(足 軽 組 の 武 具 の 出 納 を 統 括 す る 係 と 推 測 さ れ る) の 佐 藤 友 右 衛 門 ^{お ん ぶ き か か} が 作 成 し た と 推 測 さ れ る も の。こ の 資 料 に は、小 幡 二 郎 八 組 が 他 の 足 軽 組 か ら 甲 冑 82 領 の「返 却」を 一 旦 受 け た 後、35 領 を 細 工 所 ^{さい く し ょ} (藩 主 の 諸 道 具 修 復 を 担 う 部 署、現 在 の 二 の 丸 駐 車 場 の 南 東 角 辺 り に 位 置) へ、47 領 を さ ら に 別 の 足 軽 組 へ「返 却」し た こ と が 書 か れ て い ま す。幕 末 期 に 足 軽 組 の 組 間 で 甲 冑 の 貸 借 や 又 貸 し が 行 わ れ て い た こ と が う か が え る 大 変 興 味 深 い 資 料 で す。

